SHUFFLE×DC　運命の悪戯

悠久

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＳＨＵＦＦＬＥ×ＤＣ　運命の悪戯

【Ｎコード】
Ｎ９２３４Ｈ

【作者名】
悠久

【あらすじ】
１つの約束、１つの嘘それが悲劇を生み、１人の少年は新たな生を友を手に入れる。悲しみと後悔に暮れる少女は絶望の中から前を向く。２人が再び巡り会うときは来るのか？２人の道は重なるのか？ＳＨＵＦＦＬＥ×ＤＣ運命の悪戯始まります。

プロローグ

それは、一つの約束と一つの嘘が始まりだった。

幼き日の微笑ましい約束。

一人の少女を助けるために吐いた嘘。

この二つが、1人の少年を縛り、やがて悲劇を引き起こす。

新しい生を生き始める少年。

そこには新しい友との出会い。

大切なものとの出会い。

久しく手に入れた平穏

真実を知り後悔する少女。

その少女を支える、少年の友。

後悔し、絶望の淵に立ちながらも、前を向く。

少年の分も生きるように

舞台は光陽町と初音島。

三種族が混合する町と年中桜の咲く島。

魔法が存在する不思議な世界

そこで、少年少女達の物語は紡がれる。

新しい生を生きる少年と後悔する少女の道は巡り逢えるのか。

それは誰にも分らない。

今、運命の幕が上る。

第1話：過去

「響君なんて……響なんて死んじゃえばいいんだ！！」

雨の激しく降る公園に女の子の声が響き渡る。

そこには2人の少年と少女が傘もささずに向かい合っていた。

1人は整った顔立ちに、少年ながらどこか大人っぽさを感じさせる男の子。眼には強い意志の力が宿っており、目の前に立っている少女を視線を逸らさずに見詰めている。

見つめられているのは女の子。女の子はその視線を自分の目で受け止めている。少年と違っているのは、その眼に憎しみと狂気、迷いに悲しみ、相反する二つの感情を宿していることだろう。オレンジ色の髪を頭の上でリボンで止めた可愛らしい女の子には似合わないものである。

（くっ！覚悟していたこととは言え、楓本人に言われると痛いな）

言葉を叩きつけられた少年は、顔では平気なように見せながら、内心では苦痛に耐えていた。

なぜこのようになったのだらう？

なぜ少年は少女に憎まれているのだろう？

昔からだったのか？

答えは「否」

それは1つの約束と、1つの不幸な事故と、1つの覚悟がかみ合わさった結果。

物語の原点は、この出来事の1年前。
小さな約束から始まった。

1年前……
ある夏の夜。まだ蒸し暑さが残っている中、3人の男女が庭で向かい合っている。
3人の中央には水と細長い棒が何本も入ったバケツ。
傍らには火のついたロウソクが立っている。風が吹いているのか、時折揺らめいている。

「これで、最後なんだよね……」

ちょっと寂しそうな目をしたオレンジ色の髪の少女、芙蓉　楓の声が静かな庭に響く。
その手には、バケツに入っているのと同じような細い棒状のものを持っており、先端からは火花が散っている。
花火である。線香花火と呼ばれる花火を見ながら会話を続ける。

「うん。楓のそれで、最後の1本」

黒い髪を少し伸ばし、年相応の笑顔を浮かべた少年、土見　稟が楓に答える。

「だが、またやればいいさ。また、皆で一緒に。ずっとな」

先ほどの大人びた少年、神楽坂　響が言う。

３人は幼馴染であり、家同士が近所、さらにはお互いの親同士が古い知合いと言うこともあり、幼いころから一緒に遊んでいる。

「ずっと一緒？これからも？それなら寂しくないね」

不安そうな表情から一転し笑顔を浮かべる楓。

そんな楓を見て、２人は顔を見合わせ笑顔になり頷きながら

「当り前だよ。僕らはこれからもずっと一緒だ」

そんな稟の言葉に響は頷きながら「当然だな」っと同意する。

「本当！じゃあ、みんなで約束しよ！！」

「ああ、約束だ！俺達はこれからずっと一緒にいる。絶対だ！」

その言葉と同時に３人は笑い声をあげ、一緒に指切りをした。

他愛無い子供の約束。

しかし、３人にとって大きな意味のある約束が結ばれる。

だが、不幸は突然に訪れる……

それから半年後……

「それじゃ、行ってきますね」

「うん。お土産いっぱい、お願いね。響君と、稟君と、私の分」
楓に雰囲気がそっくりな女性、楓の母である紅葉の言葉に楓が反応する。

「わかってますよ。響君と稟君。楓のことよろしくね」

「「はいっ」」

「ふふ、いい元気。明後日には戻りますから幹夫君、子供達と家のことお願いしますね」

「ああ、任せておきなさい」

紅葉の言葉に答えたのは、楓の父、幹夫である。

「くしゅんっ。いってらっしゃ～い」

くしゃみを一つした楓は、母を見送るために手を振る。

これから3日間、楓の母、稟の父母、響の父母は旅行に出かけるのである。
そのため、稟と響は楓の家に泊まっていくため、楓は楽しみにしていた。

それは2人も一緒のようで、顔が笑顔である。

「響君、稟君、遠慮はいらないぞ。自分の家だと思ってくれ」

幹夫が2人に向かってやさしく声をかける。それに二人は同時に頷き、家の中に入って行った。

しかし……

「くしゅんっ……くしゅんっ……くっしゅん！」

「楓ちゃん、大丈夫？」

夜、3人は楓の部屋で遊んでいた。くしゃみの止まらない楓に稟が声をかける。

「だい、くしゅんっ……大丈夫です」

「楓、無理するな。楓が体調崩したら、俺達は心配するぞ。今日はもう寝よう。なに、明日も明後日もあるんだ」

「……うん、分かった」

響に説得され布団に入る楓。申し訳なさそうにしていたものの、布団に入るとすぐに寝息を立て始めた。

楓は今日、2人が泊まりに来るので前日緊張し、ほとんど寝ていなかったのだ。

そうやって1日目が過ぎて行った。

だが次の日

「はぁ……はぁ……」

「おじさん、楓ちゃんの熱が下がらないし、苦しそうだよ」

「父さんたちを呼び戻せないんですか？」

「うむ、そうだな。一応、連絡を取ってみるよ。その間楓のことを頼んだぞ」

前日にもまして体調が悪くなった楓を看病していた3人。そして幹夫は楓の状態を伝えるために電話をかける。旅行に行った自分の妻に。

『はい、幹夫さん？どうしたの？』

電話に出た紅葉は突然の電話に驚いているようだ。

「すまない。楓が熱を出してね。下がらないんだ。熱は４０度近くある」

『っ！？大変っ！！ちょっと待って……分かったわ。今からすぐに帰るから。それまで楓のことよろしくね」

神楽坂夫婦と土見夫婦に了承を取ったらしい紅葉は慌てて返事をする。

「分かった。皆にも済まないと伝えてくれ」
そう言って電話を切る幹夫。
それが最愛の妻の最後の声とは知らずに……

3日後

「……ん、う〜〜〜ん」
楓が目を覚ますと、そこは一面白い部屋だった。
あれから意識を失った楓は病院に運ばれ入院していた。
「っ！？　楓！！　気がついたか！」
「楓ちゃん！」「楓！」
「あれ？お父さん、響君、稟君。ここは？」
目を覚まし3人を確認した楓は疑問を口にする。
その疑問に幹夫が答える。
「ここは病院だぞ。あれからお前は3日も眠ってたんだ」
「3日！？　じゃあ、お母さん達はもう帰ってきちゃったんだ……
せっかく響君と稟君と一緒にお泊まりで来たのに」

本当に残念そうにする楓。

「「……」」

それに対し他3人は沈黙するしかなかった。

「？　どうしたの？」

その様子を怪訝に思った楓は問う。

「楓、落ち着いて聞いてくれ」

「う、うん」

いつもと違う幹夫の声に何かを感じ取った楓は真剣になる。

「実は……お母さんは、いや、お母さん達は……交通事故で死んでしまったんだ」

「え？　死？？」

「ハンドル操作を誤って事故を起こしたんだ。即死だったらしい」

「嘘……嘘だよ！！そうでしょ？響君、稟君！！」

幹夫の言葉が信じられないのか、2人を見る楓。その内心は否定の言葉を求めていたのだろう。「冗談だよ」って言ってくれるのを信じているのだろう。

しかし、

「本当だよ、楓。父さん達は皆死んじゃったんだ。もう会えないんだよ」

覚悟を決めた響が楓に答える。

「いや、嫌だよ！！イヤイヤイヤイヤイヤ……」

「楓！？落ち着きなさい！

頭を押さえながら繰り返す楓、それを鎮めようとする幹夫。
しかし一向に落着きを見せない。いや、それどころかより取り乱している。

「イヤイヤイヤイヤイヤ……イヤァァァァァアア！！！」

そして悲痛な叫びとともに、楓の心は折れた。

それからは大変だった。
意識があるものの、全く生気が感じられなくなった楓は、食事を取らなくなり、言葉も交わさずに弱っていく一方だった。
まるで、死に一歩一歩向かっていくかのように。

「楓ちゃんははこのままだと危ないでしょう」

響がそんな声を聞いたのは、たまたまだった。

楓の見舞いに来た響は、顔なじみになった看護婦さんに幹夫が来て、先程楓の主治医の部屋に入って行ったと聞き、その後を追っていた時だった。
少し開けられた扉の向こうから、楓の主治医の声が聞こえて来たのである。
その会話は響にとって、聞き捨てならないものだった。

「そんな！先生なんとかならないでしょうか！？」

必死の形相で詰め寄る幹夫。

「楓ちゃんは現在、生きる目的を失っている状態です。何のために生きればいいのか分からない状態なのです。だから、生きる目的を。なんでもいいんです。生きる目的を与えてあげられれば、おそらくは」

主治医の先生答える。

「生きる目的……」

先生の言葉を受け止め考え始める幹夫、しかしなかなか案が浮かばない。

だが、盗み聴きしていた響は、

「！！生きる目的！　それなら……」

響は踵を返して病室へと向かっていく。
ある覚悟を胸に抱いて。

次の日

「ごめんね、お父さん、稟君。もう大丈夫だから」

昨日までとはうって変わって、笑顔を見せる楓の姿があった。

「ああ！！ああ！楓、本当によかったっ」

涙を流しながら楓をその腕の中に抱く幹夫。
その眼には生気が宿り、若干涙もにじんでいる。

「よかった、楓ちゃん。元気になってくれたよ、響君」

「……ああ、そうだな」

安心したような表情の稟に対し、返事を返す響は暗かった。
しかし、楓が元気になった喜びから誰もそのことに気づけない。

そしてもう一つ。

楓が響と眼を合わせようとしない事にも、誰も気づけなかった。

こうして、響の計画は成功に終わった。

「楓。紅葉さんを呼んだのは俺なんだ。寂しくなってな。両親に会いたかったんだ」

「予定を繰り上げて帰って来てくれることになったよ。その帰り道で事故は起こった。だから、紅葉さんは俺が殺したようなもんだ」

オカアサンヲ、コロシタ

コノヒトガ、コロシタ

ニクイ、ニクイ、ニクイ

コノヒトガ、ニクイ

こうして少女は生きる目的を見つける。

一人の少年の嘘によって。

少年を憎み、仇を取ろうと。

少年は覚悟する。

少女に憎まれ、殺される。

そして半年後、雨の公園で、ずぶ濡れになりながら、２人は言葉を交わしていた。

第2話：5年後の今

「……ふぅ」

時刻は放課後。空の色が茜色に変わり始めた時刻。
学校の屋上に一人の少年、いや青年がいた。
屋上の鉄格子の柵に肘を付き、そこからグラウンドを下校する生徒の波を眺めていた。
大人びた表情を持った青年は、茶髪の髪を風でなびかせながら、タメ息をついている。
その顔には、どこか疲労の色が見て取れた。
この青年こそ、楓に嘘を吐いた少年、神楽坂　響である。

「ここにいたのか、響。まだ帰らないのか？」

そこに新しい男の声がした。
黒い髪に制服姿の青年が屋上のドアを開けて入ってくる。
少年時代の面影を感じるこの青年は土見　稟である。

「稟か。家に帰ると楓がいるだろ。わざわざ自分からイジメられるほど俺はMじゃないんでね。しばらくは時間を潰していくわ」

微笑を浮かべながら、稟の言葉に答える響。あの事故で両親を失った2人は、幹夫の世話に、つまり芙蓉家に居候することになった。もちろん楓も一緒である。

「響……すまない」

「なんだ稟。突然謝罪を受ける理由がないのだが？」

「俺はあの時、響に全部背負わせちまった。本当なら俺も背負わなくちゃいけないはずなのに」

稟は5年前の、響が楓に嘘を吐いた時のことを思い出しながら言う。

もうあの事故から5年。中学を卒業した3人は、3人とも国立バーベナ学園へと入学した。

「言いっこなしだ稟。それにお前とは約束したろ。もし俺が楓に殺されるようなことがあれば、どんな手段を使っても隠蔽するって。それに、俺がいなくなった後に楓を支えられる奴が必要なんだよ。お前の方が俺より重いもんを背負うことになる。謝るなら俺の方だ」

5年前、稟は響と楓の関係にすぐに気づいた。そして響を問い詰め、真実を知る。

それは幹夫も同じで、現在この秘密を知っているのは3人だけである。

「でも、お前今日もＫＫＫに呼び出されてリンチされたんだろ」

「知ってたのか？まぁ、流石に殴られ慣れてきたな。自然に体が衝撃を抑えるように動いたり、受け身を取ったりできるようになったよ。今じゃほとんど怪我なんてしなくなったな」

ＫＫＫとは、「きっと　きっと　楓ちゃん」と言う名のもとに集まった楓の親衛隊である。彼らは、楓が嫌悪する響が、楓と一緒の家に住んでいるのが許せずに、響を呼び出してはリンチしているのだった。それは中学時代から続いており、響の日常の一つになって

いる。

その他にも響は楓に、靴や制服をゴミ箱に捨てられるのは、朝食は響の分だけ用意されなかったり、時には刃の出たカッターを投げられ手を切ったり、階段から突き落とされたり。考えただけでも背筋が冷えるようなことが多くあった。

（よく今生きてられるよな、俺。）

その時のことを思い出し、改めて感じる響。

「だから「稟」って……」

「これも楓のためだ。もし当時先生の話を聞いたのが俺じゃなくお前だとしても、お前は俺と同じようなことをやってただろう？」

「それは……」

響の言葉に黙り込むしかない稟。

なぜ2人がこれほど楓に執着するのか。それは幼い日の約束、「すっと一緒にいる」が関係している。

当時幼かった2人にとっても、あの事故は大きな爪痕を残していた。

両親の死。それはとても耐えられるものではなかった。あの約束抜きでは。

あの約束は、2人にとっての生きる目的になり、絶対のものとなる。

だから当然、どんな手段だろうと楓を救わなくてはならなかった。
一種の呪縛のように……

「だから、お互い様だ。この件の話は以上！　それより稟。お前の方はどうなんだ？　神界の姫リシアンサスに魔界の姫ネリネ、時雨先輩にカレハ先輩、さらにはプリムラ。クックック、まさにハーレムじゃないか。それとも誰か1人に決めたか？」

神界・魔界

数年前にある遺跡で起こった開門と呼ばれる現象。その後、世界には神族と魔族がいることが判明し、後に、人界・神界・魔界の3世界は共存の道に進んでいく。

当初は魔法を使える神族、魔族を危険視する声もあったが、歴史の陰に隠れて生きてきた人界の魔法使いたちが名乗りを挙げ魔導教会を設立、混乱を収めた。

これにより神族・魔族は、耳が人族より少し長いだけの人間として受け入れられた。最初こそ戸惑いがあったものの、ほとんど自分達と変わらない姿を見て、両者ともにすぐに馴染むことができたのであった。

実を言うと、響自身も魔法使いの一人であるが、それは稟や楓も知らないことである。

リンチの際にも薄い魔力の壁を張り、威力を軽減してるのもあるので、怪我をしにくい。

そして稟はその神界・魔界の姫たちに愛されていた。

そこでついたあだ名が、「神にも、悪魔にも、凡人にもなれる男」である。

「ぐっ！？　それはまだ……」

「まぁ、ゆっくり考えることだな。神界は一夫多妻制だし」

笑いながら言う響。それに対し何も言えなくなる稟。

「さてと、そろそろ暗くなってきたし帰るか。行こうぜ、稟」

「あ、ああ。分かった」

そうして2人は屋上を後にして行った。

ここは光陽町。

そして、現在響たちが居候している芙蓉家は、その住宅地にある。

別に代わり映えしない普通の1軒家である。

しかし、その両隣の家はそうではない。2軒ともかなりの豪邸である。

1軒は洋館であり、ヨーロッパなんかにあるような家。

1軒は和風の家であり、古き良き日本の時代を思い出させる。

それぞれの家に住んでいるのは、魔王・神王である。

彼らは愛しの娘の思い人が土見　稟であることを知ると、その住まいの隣へと、ある日突然引っ越して来たのである。

そんな普通とは若干離れてしまった家へと2人は帰宅した。

「おかえりなさい、稟、響」

出迎えてくれたのは、黒い服に紫の髪を長くのばした魔族の少女、名前をプリムラ。

神界・魔界のある研究のために生み出された少女だが、ある出来事をきっかけに、今では芙蓉家に住んでいる。

人界に来た当初はほとんど感情を見せなかったプリムラだが、稟と触れ合う内に感情が芽生え、今では時折笑顔を見せるほどである。

「「ただいま、プリムラ」」

響と稟が同時に挨拶すると、嬉しそうに笑顔になり、稟にすり寄っていく。このプリムラも稟に好意を寄せる者の一人だ。

「おかえりなさい、稟君」

その後ろから、エプロン姿の女性が顔を出す。緑の髪を頭の上でリボンで縛った女性である。

5年前とは変って、すっかり女性らしくなったこの女の子こそ、芙蓉　楓である。

「あ、ああ、ただいま楓」

「稟君、もうすぐ夕食の支度ができますので、待っててください」

そう言いつつ、台所へと姿を消す楓。

相変わらず響のことは無視である。

しかし少し前までは、稟と一緒に帰って来ただけでも罵倒されて

いたのでマシになったと言ってもいい。

「じゃあ稟、俺はいつも通り自分の部屋にいるわ」

苦笑しながら稟へ断わりを入れ、響は2階にある自分の部屋に行くために階段を上って行った。

夜

あの後響は、食卓に自分の分の食事がないのを確認した後に、2階にある自分の部屋へ行き仮眠をとっていた。

そして、楓が自分の部屋へと戻り、下の階に誰もいなくなったのを確認したのち、静かにドアを開けて下に降りる。

すでにリビングの明かりは消されており、真っ暗である。魔力で視力を強化しつつ電気のスイッチを探りあて明かりをつける響。

そしてそのまま台所へ行き、引き戸の奥にしまわれていたカップラーメンを1つ取り出し、やかんで沸かしたお湯を入れて待っている。

食べざかりの年頃の青年にとっては栄養のバランスが悪い食事だが、これが彼にとっては日常であった。

前に幹夫にも、栄養のことを心配され、楓には内緒で夜食を作っておくと言われたこともあったが、響はその申し出を断った。母親を失ったこの家庭の食料を管理しているのは楓であり、内緒と言ってもすぐにばれてしまうからである。

その代り、幹夫には仕事の帰りにカップラーメンや弁当を欠かさずに買ってきてもらい、こうやって戸棚の奥にしまってもらっているのである。

「よし、3分経ったな。いただきます」

言いながら蓋をあけ、麺を啜りだす響。

今日は昼休みにＫＫＫに呼び出されたせいで、昼飯を食べ損ねていたので腹ぺこである。

あっという間にカップラーメンを食べ終えた響は、容器を片付けようと立ち上がる。

「……響君」

食べ終わるのを待っていたかのように、その背に声がかけられる。

「おじさん？　どうしたんですが、こんな時間に。早く寝ないと明日の仕事に差し支えますよ？」

響に声をかけたのは幹夫である。その顔は申し訳なさでいっぱいだった。

「すまないね、響君」

「ははっ、今日稟の奴にも同じようなシチュエーションで、同じようなセリフを聞きましたよ。たぶん言いたいことも一緒でしょう？」

「そうか、稟君も……ああ、そうだね。きっと一緒だね」

「ふむ。何でおじさんも稟も、俺に謝るんでしょう？」

心底不思議そうな顔で問う響。

「きっと稟君も感じているんだろう。最近、楓の様子が変だと思わないかい？　前までは周りの人間使ったり、持ち物を隠したりするくらいだっただろう？　しかし最近は楓本人が手を出すことが多くなったように思えるのだが。しかも危険な手口で」

幹夫の言葉に「なるほど」っと頷きながら考える響。響にとってもその疑問は前から持っていたものだ。

しばらく考え、響は考えを口にした。少し前から響自身が考えていたことである。

「楓は頭のいい子です。……おそらく嘘に気づき始めているのでしょう。そのせいで、精神が安定していないのでわ？」

「ふむ。私もそう考えていたんだ。どうだろう響君。これをきっかけに本当のことを話してみては？」

「それは駄目です。できることなら楓はこのまま嘘を信じ続けてほしい。真実を知れば、きっと楓は壊れてしまう」

「しかし、それでは君が！？」

「俺のことはいいんです。前にも話したように、この嘘は俺のためでもあるんです。昔、いや今でも、楓は俺にとっての生きる理由です。楓が壊れてしまったら、きっと俺は生きられない」

「くっ！？　私は無力だな。実の父親のくせに娘にも、親友の息子

たちにも何もしてやれないとは……」

本当に悔しそうに俯く幹夫。

その手は握り拳ができており、爪が食い込んでいる。

「いえ、おじさんは無力なんかじゃないですよ。こうやって俺や稟、楓が生きているのも、おじさんが働いてくれているからです。俺達を育ててくれてありがとうございます。父さん」

「っ！？」

響の言葉を聞き、咄嗟に涙を流しそうになるのを堪える幹夫。

「それじゃ、明日も学校なので寝ますね。お休みなさい」

そう言い部屋を出ていく響。その背中を見送る幹夫。

「強いな、響君は……」

1人になったリビングでポツリと言葉を漏らす幹夫。

彼は心の中で謝罪と感謝を繰り返す。

自分の愛する娘を救ってくれた青年に。

しかし、幹夫は人生で2度目の大きな後悔をすることになる。

このとき、なんとか響を説得し、楓に真実を伝えていれば……と

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9234h/

SHUFFLE×DC　運命の悪戯

2010年10月10日21時04分発行